



## お客さんが来たよ (9月)

年長 たか2組

2学期の初日から、3人の子が工作で家づくりを始めました。キャップを体にしたネコやクリオネなど、それぞれの好きな生き物の家になっています。小さな体に合わせて、ベッドやお風呂、食べ物など、思いついたものを細かくつくっていきます。家づくりは2週目になっても毎日続き、家の中の物が日々増えたり、部屋を繋げてどんどん広がったりしていきます。



そのような中、生き物たちの家に珍しいお客さんが来ました。別の場所で車や家をつかって並べていたAちゃんとBちゃんは、ヤクルト容器で人間をつかって動かしていました。これまでは自分たちのつくった乗り物の場で遊んでいましたが、どんどん素敵になっていく3人の家を見て、遊びに行きたくなった様子でした。最初は人形をもって周りをウロウロしていましたが、Aちゃんが「ねえ、入っていい?」と聞くと、「誰か来た!」「いいよ~!」とネコたちの家に喜んで迎え入れられました。遊びがつながった瞬間です。そこから、人形の家同士の行き来が生まれました。「今度はうちにも来てよ!」



「夜の7時になったらお泊りだよ」「今日のごはんはお肉焼くね!」と、新たな関わりから、人形でのやりとりや内容も増えていきます。

そのようなやりとりを周りで聞いていると、楽しそうな様子に「人形つくりたい!」と仲間が増えてきて、ハムスターやペンギンなども登場しています。つくった人形や家をきっかけに、いろいろな仲間ともつながりながら遊び出している子どもたちの姿があり、ますます盛り上がっていきそうです。(大塚美帆)



## 鍵が違います (9月)

年少 つくし組



1学期、つくし組では、年長組の子が持っていた鍵に憧れて、自分たちなりの鍵をつくって遊んでいました。

2学期が始まって二日目、Aちゃんに「来て来て」と呼ばれた先は、ままごとのキッチンでした。「見ててね」と言うと、収納の戸を180度開けて得意げに、そのままその後ろに隠れました。2学期当初に棚の位置を換えたので、そこが隠れられる場所になっていたことには、担任も感心しました。「ガチャ、鍵がかかっているから開かないんだよ」と言うので、手に鍵を持っているふりをして開けようとする、「ブブー、違う鍵です。あっちにあるよ」と、少し離れた机の方を指差しました。そこまで行き、そこには無い、空想の鍵を取って、そばで見ていた子達も入って一緒に開けました。「ガチャ、ギー」という音と共に、ゆっくりと戸が開きました。Aちゃんその演出に、開いたことをみんなで大喜びしました。



喜ぶのも束の間、今度は別の場所に鍵を隠しに行くと、また戸が閉まってしまいました。みんなで鍵を持って来て開けようとする、なんと「ブブー、鍵が違います」と開きません。こっちの鍵かな?とまた鍵を持って来て試しますが、どれも「ブ



ブー」と鳴ってしまいます。そうしているうちに、とうとう「バキ、壊れました」と開かなくなってしまいました。どうするのだろうと見守っていると、子ども達は「直そう!」と側にあったカップやヤカンを使って修理を始めました。大人の予想を上回る、子ども達の発想の転換は本当に面白いですね。3歳の時期は、実際にはそこに無いけれども、頭の中があれば、それを使って遊べる力があります。それを言葉や音、動きなどで、自分なりに表現して伝えることの楽しさを育てていけたらと思っています。(細井佑香)

## プレイデー

2023.9.30

### 年少

2学期に入り、年少組では、よじ登り台やジャンプタッチ、ボール投げ、トンネル潜りと色々な運動遊びをしてきました。「ジャンプしてパンをタッチするの」「雨のトンネルがいい」「うさぎに変身して跳ぶよ」とクラスで出てきたアイデアを織り交ぜながら、3つの「冒険の道」を作りました。プレイデー当日は子どもたちが自分で挑戦したい道を選び、おうちの人たちが見守る中、自分のクラスの島を目指してコースを渡り切ることができました。

### 年中

「風になれ」では、みんなで走ること、バランスをとって走ることが楽しくなっていました。走り方も力強くなり、二人組でバランスをとったり、互いの勢いを感じながら調整したりして走りました。「オレンジバッジの挑戦」では、子ども達が日常の中で、挑戦していたことや仲間から刺激を受けて新たに考え、頑張ってきたものに取り組み、一人ひとりが自分自身の力を最大限に発揮していました。

### 年長

今年度は、新たに「たま手つなぎきょうそう」を考案しました。5~6人の子どもたちのグループが手を繋ぎ、両端の子のみ手を使って玉をとることができます。中心にいる仲間の体を使ったりして、玉を多く取る工夫が求められます。リレーは、練習から白熱し、クラスで作戦を考え、バトンを落とさない工夫やどうしたらうまくボールを回れるかを考えていきました。当日は、どちらのクラスも力を発揮し、充実した一日になりました。



## 園外保育

2023.9~10

### 年少

大きいバスで出発し、子どもたちは大喜びです。羽村動物園に着き、プレーリードッグやサーバル、ミーアキャットなどの動物を見学しました。キリンのいるサバンナ園では、「こっちきた〜!」とその迫力に大興奮です。ペンギンが泳ぐのを間近で見られる水槽も楽しみました。お昼は梅林の木陰でお弁当を食べてパワーチャージ!です。食後はとんぼがたくさん飛び交う広場で走り回り、帰り道のバスではぐっすり。暑い中よく歩き、頑張りました。

### 年中

坂道の多い、多摩動物公園ですが、子ども達は地図を片手に、動物に会うことを楽しみに歩きました。「ぞうは大きいね」「きりんのペロは本当に黒かった!」「模様も違うね」と気づいたことを次々に話しています。ライオンバスにも乗ることができ、ライオンの迫力を味わった子どもたちは、「怖かった」「食べられるかと思った」「足大きいね」「牙が見えた」と大興奮していました。



年長

10月の園外保育で高尾山に行きました。バスと電車を乗り継ぎ、いよいよ登山の開始です。途中までは、舗装された道路を歩きますが、いよいよ4号路の山道を行きます。

最初は、元気だった子どもたちも、30分も過ぎると、「疲れた～」と歩くペースにも差が出てきました。しかし、プレイデー後でチームワークが高まっていることもあり、仲間の手を取り、支え合いながら頂上に辿り着くことができました。仲間と一緒に助け合いながら、喜びを共有できた遠足になりました。



## どんぐりころころ虫 10月

年少 すみれ組

すみれ組では、「どんぐりころころ虫」が大人気です。10月、園外散歩で上水沿いを歩きながら、たくさんのどんぐりを集めてきました。

クラスで読んだ『どんぐりころころむし』（作：澤口たまみ・絵：たしろちさと）という絵本をきっかけに、「みんなが拾ってきたどんぐりからも出てくるかな～」と、あえて茹でたり凍らせたりせずに置いておきました。すると日々新しいどんぐりころころ虫が生まれ、それを見つけるたびに子どもたちは大興奮。「わっ、動いてる！」「これ動かないよ、寝ているのかな？」「この穴から出てきたんだよ」と、どんぐりころころ虫の姿を眺めながら、子どもたちは思い思いに呟きます。

「触るとぷにぷにしていて気持ち良いんだよ」と私が手のひらに載せてみると、それまで遠巻きに見ていた子も勇気を出してチョンッと指先でつつき「本当だ、可愛い」「さわれた！」と顔を綻ばせていました。今では登園してくるたびに「また生まれてる！」「どこどこ！」と子ども同士が集まっていく姿があります。小さな虫が、また一つ、クラスに楽しみを運んできてくれました。（松尾桃子）



## やってみたい、おもしろそう 11月

未就園 2歳児クラス『ぴよぴよ』

園庭の砂場に遊びに行くようになり、子どもたちもお部屋とは違った開放感を味わっています。シャベルでトラックの遊具に砂を乗せて運んだり、カップに砂を入れて小枝をローソクに見立てて、ケーキを作ったりしていました。砂の感触だけではなく、自然物ともふれ合いながら遊んでいます。

お部屋の中では、好きなものを見つけてじっくりと取り組んでいる子も増えています。

指先が器用になってきて、遊具のハサミを使って動物の毛をトリミングしたり、病院の先生になって、たくさんのおかちゃんの熱を測ったりしています。

レジを見つけた子がボタンを押して遊んでいると、ブロックを持った子がやってきて、ニコニコと手を差し出していました。まるで「おつりをください」と言わんばかりの光景に見えました。その子の思いとは違うのかもしれませんが、子どもたちの何気ない仕草に、自分が見たことや、体験したことが表れているように思います。

ぴよぴよのお部屋で過ごしている中でも、自分だけの世界から少しだけ周りのことに目が向くようになってきています。おもしろそうなことに「やってみたい」と子どもたちが集まってきて、繋がる場面も少しずつ見られるようになってきました。

子どもたちの相手を感じられる一歩を大切に、これからも過ごしていきたいと思えます。（佐藤 恵）





## 虫研究所 11月

年中 ぞう組

1学期から細く長く続いている虫研究所。虫が沢山いる季節は、園庭にくる虫をつかまえては、飼い、餌を集め、お世話を繰り返していた子どもたちですが、寒くなってきて、なかなか虫をつかまえることができません。おうちでつかまえてきたカマキリを観察して、捕食する様子をじっと眺めたり、暖かい日に飛んできた蝶をつかまえようと、お手製の虫網を長くしたりと、子どもたちは虫と向き合ってきました。その子どもたちが、保育室の中に大きな木が出来上がると再び、動き出しました。



「木の樹液を虫は吸いに来るんだ」「虫をつくる」と素材をとりに出かけます。「羽は何枚だったっけ?」と仲間に聞きながら、羽のかたちや体のフォルムにこだわってつくりはじめます。

「できた!」と、Aちゃんは満足気に外に出ていきます。虫研究所で遊んでいると年長の子も達が、本物の赤とんぼを見せに来てくれました。「これは、弱っているんだけどね」「ほらよく見て、羽は4枚あるよ」自分のつくった赤とんぼに、本物の赤とんぼがとまっている様子をAちゃんはじっと見つめています。「羽、四つ」「足は?」必死に数えます。「足は、2本じゃない」「足りない…」「口にも獲物を啜るためのものがついているんだよ」と年長児に教えてもらいました。



そのあとにつくり加えた赤とんぼが、右の写真です。本物に出会うことで、さらに気づきが生まれ、そのものらしさが増していきます。この姿に刺激を受けて、蝶をつくっている子どもたちは、花から吸った蜜をお腹の中に入るような仕組みを考えだします。その話を聞いたBちゃんは、「花の蜜を吸うのは、蝶だけじゃない」「ミツバチと奪い合っているんだ」「それではちみつができるんだよ」と話しが続いていきました。



ものとの関係や、自然界の循環を子どもたちは考えるようになってきました。現実の世界を取り込みながら、仲間と虫の世界をつくりあげていきます。まだまだ虫への探究は続いていきそうです。(深田美智子)



## 高尾山とケーブルカー 11月

年長 たか2組

「こどもがつくる世界」の後もホールでは、人形を動かしたり、思いついたものをつくり足したりしながら遊んでいました。その中で、「ここにも高尾山つくろうよ」と高尾山づくりが始まりました。つくりたい仲間が集まり、木や吊り橋、階段、天狗など、実際に登った山道や途中にあったものを思い浮かべながら、細かく再現していきます。



数日かけて山道ができてきたところで、ケーブルカーをつくり始めると、「線路を何でつくるか」という問題が発生します。ダンボールにストローを貼りたい子たちと、ダンボールにペンで描きたい子たちで意見が分かれ、なかなか決まりませんでした。

その日のクラスタイムで高尾山チームが線路の話をする、「ストローのほうがいいんじゃない?」「ペンで一回描いてからストローをつけられ?」「半分は描いて、半分はストローは?」「割り箸にしたら?」など、色々な意見が挙がります。「ストローとか割り箸をつけるのはやだ」という子たちに、周りが「なんで?」と聞くと、「ストローとかはさ、走らせてるときにガタガタするから、いやなんだよ」という理由が出てきます。「でも、そんなにガタガタしないよ」「試しにやってみたら?」と返していく声もありましたが、その中で、「じゃあさ、ケーブルカーの上にロープをつけたら?」という新しい視点が出てきました。それを受けて、「上にロープをつけて、ケ

ケーブルカーをシューツでやるほうがいいんじゃない?」「上にヒモをつけてね」「太陽と同じにしたら?」「太陽と月みたいに、透明のヒモで動かせるようにしたらいいよね」と、テグスで動かせるようにホールに吊るした太陽と月のことを思い出して、具体的な提案がありました。ケーブルカーをテグスで吊るして動かせるようにする案には「いいね」と賛同が集まります。

「それなら線路につけたストローとかもガタガタしないんじゃない?」「これぐらいの高さでつけたら本物みたいに走ってるように見えるし、線路につかないからガタガタしない」「線路があって、これくらい上」と、手で線路とケーブルカーの高さを示しながら、やりとりしていきます。「ガタガタするから」と反対していた子たちも「それならいいよ」と了承し、線路はダンボールにストローをつけて、ケーブルカーはテグスで動かせるようにすることになりました。



翌日から、早速ストローの線路を貼っていきます。山の途中に駅もつくり、実際にケーブルカーが動くようになったときには「おおー!」「ついに高尾山ができた!」「これで下から登れる!」と、周りの子どもどんどん集まり、人形たちを次々にケーブルカーに乗せていました。

遊びや生活の中で出てきた問題も、日々、クラスの仲間と共有し、考え合いながら進んでいます。お互いに意見やアイデアを出し合うことで、自分だけでは思いつかない方法や視点も出てきます。実際にやってみて、考えたり振り返ったりしていくことで、自分たちのやりたいことを深めていく年長の姿があります。(大塚美帆)

## ソニー幼児教育支援プログラム最優秀園実践発表会を開催しました

2023年12月2日(土)白梅幼稚園にて、2022年度ソニー幼児教育支援プログラム最優秀園受賞に伴う実践発表会を行いました。

「臨場感をかたちづくる」をテーマに、日常の自由あそびにおいて、子どもたちが興味をもったことや思いついたことに積極的に取り組んでいることについて園内研修で検討してきたなか、電車をめぐる遊びがありました。その実践をまとめ、ソニー幼児教育支援プログラムの「保育実践論文」に応募したところ、2022年度の最優秀園を受賞しました。



当日は、北海道から九州まで全国から160名を超える保育関係者が参加されました。午前中の公開保育では、こどもがつくる世界を経て、さらに、子どもたちが繰り広げていく遊びの世界を参観していただきました。一人で黙々と作っている姿、仲間と一緒に考えを出し合いながら一緒に取り組んでいる姿、参観者の方に自分のつくったものの仕組みやこだわってきた部分を説明している姿などが見られました。自信に満ちて、制作物や遊びの様子を見せる子どもたちの姿を、とても頼もしく感じました。



後半の研究発表では、本園の実践への取り組みや、本日の保育の取り組みについて各担当が報告し、その後、参加者の方々とグループ討議を行いました。参加者の方からは、様々な視点からたくさんの感想やご意見をいただきました。聖徳大学教授(元文部科学省教科調査官)の河合優子先生に「幼児の学びを考える——白梅幼稚園の実践から」をテーマに記念講演をしていただきました。これからの保育への課題が明確になり、充実した時間となりました。



## これ、使っていいよ 1月

年少 たんぽぽ組

ある日、AちゃんとBちゃんがネコ耳をつけていました。ネコたちの居場所を決め、小さい積み木を並べた焼き場で魚を焼いて食べたり、「夜になった！」と誰かが呟くと床に布を敷いて寝床をつくり寝たりしながら、一日の生活の流れをなぞって遊んでいます。

ネコちゃんが寝て起きると、場面は朝です。「今日は寒いからお風呂に入ろう」ということになりましたが、保育室にお風呂の場所はありません。「お風呂をつくろう」ということになったものの、お風呂になりそうな大きめのダンボールはありません。意気消沈しかけていた時、以前牛乳パックをつなげて作ったゴミ集積場用の囲いが目に入りました。「ゴミ集積場用の囲いをお風呂にしよう」ということになると、今度はお湯作りです。意気揚々と新聞紙を破っているAちゃん、Bちゃんの姿を見て「やってみたい」「手伝うよ」という子が次々やってきました。お湯の準備が整うと、当然子どもたちは中に入ってみたくくなります。でも、ぎゅうぎゅうに入っても3人が限界です。しばらくは「かーわって」と言いながら順番を待ち、何とか交替していましたが、順番待ちの子が列になっています。そんな時、Cちゃんがつくったダンボールのごみ収集車を「お風呂に使ってもいい」と提案があり、一緒につくったDちゃんも「いいよ」と同意して



てくれました。その声を聞き、Eちゃんも「このごみ収集車も使ってもいいよ」と伝えに来て、お風呂は三つになりました。その後、フルーツ風呂やぶどう風呂など種類の違う三つのお風呂が出来上がり、出たり入ったりしながら遊ぶ日が数日続きました。

子どもが手をかけてつくったモノには、思い入れがあります。それを「別のモノにつくり変えてもいい」と言った子どもの気持ちには、新たな遊びのために生まれ変わることへの期待感があったのではないのでしょうか。(阿部和香子)



## お話の世界に入り込む 2月

年少 つくし組

3学期はお面を被った表現遊びが、年少、年中どのクラスでも盛り上がっています。つくし組では子ども達が特に『3びきのやぎのがらがらどん』のお話を気に入り、劇遊びにして楽しんでいます。がらがらどんのヤギのお面をかぶって、担任が扮するトロルの居る橋を渡ります。初めは「小さいやぎのがらがらどんです」「2番目の



大きいやぎが来るから食べないでください」と絵本の筋書き通りに話していた子ども達は、次第に食べ物や動物の人形を持ってやって来るように工夫します。「いいものあげるので食べないで下さい」「ピィピィ(鳥)あげます、これで遊んでね」。一人が新しいことを始めると、周りもすぐに気が付いて友達のやっていることを自分なりに取り入れます。ケーキ、ドーナッツ、茄子、人参など保育室にある思いついた物を、手で持つ人もいれば、かごに入れて持って来る人もいました。プレゼント作戦を

充分に楽しんだ次には、「勝負だ！」とトロルと戦うようになりました。子ども達は先にトロルの攻撃を受けてから、「全然効かない」と自分の技を繰り出します。「この針(角)で!」「ワン、ツー、スリー、おならぶー!」「ビーム!」。やぎ以外にも、プリンセスやおばけ、ヒーローになり、戦います。パッと見て何に扮しているのかわからず、後ろに並んでいる人に「誰になってるの?」と訊くやりとりも見られます。そのうちに制作物を得意気を持って来る人が表れると、トロルをやっつける特製武器をつくる人達が出てきました。ホースから水が出て来る武器、毒のチョコが出て来る機械など、バラエテ



イーに富んでいます。倒した後は、「毒を治す薬」や「元気になる魔法」もくれる優しさにまたほっこりします。

子ども達は同じやりとり(セリフ)を何度も繰り返すことで物語の世界に入り込みながら、独創的に展開を膨らませています。物を使ったり、やりとりを変えたりとそれぞれが工夫するのを見て、クラスにある遊具やクラスの仲間のことをよく分かっている3学期の姿があります。劇遊びを通して、この年齢ならではの自由な発想でお話を広げ、子ども達は表現の仕方を身に付けたり、言葉でのやりとりの経験を重ねています。(細井佑香)



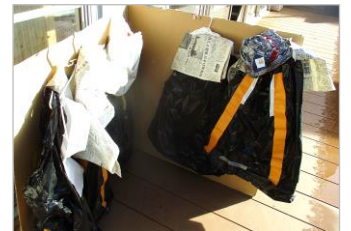
## 消防隊はこちら

2月

年中

きりん組

消防隊ごっこが遊ばれ始めたのは2学期が始まった頃です。A児の「消防の人になりたい」が、きっかけです。ビニール袋を切ってビニールテープを貼って、消防のマークを付けました。これを見た3人が早速A児から作り方を聞いてマークを作っていくと、きりん消防隊が誕生しました。4人は服を着て園庭に出て火事が出ていないかパトロールを始めました。暫くすると部屋に戻り、今度は「火を消すからホースを持って行かなくっちゃ」とホースを作ります。さらに、帽子や酸素マスクも作り足します。遊んでは気付いた物を作り、作ってはまた遊ぶことを繰り返しました。皆の協力が必要になったのは、消防車作りの場面です。保護者の方にもご協力いただき、自分たちで大きい段ボールを家から持ち込み、塗装をしました。真っ赤な消防車は目立ちます。内装については、図鑑や本、「パソコンで調べた」資料を持って来る子がいて、興味の深まりの中で次第に本物に近づきつつありました。



園庭に消防車を持ち出すと、周りの子どもたちが集まり、年齢を超えて繋がります。救急隊(レスキュー)が登場して、「誰かいませんか?」とけが人を探しています。彼らに助けられた人が運ばれる病院も必要になりました。消防署のことを「基地」と名付けて作り、遊びの拠点を増やしていきました。

3学期にこの遊びはどうなるのか、見守ったところ、子どもたちが思いついたのは「消防隊になってみよう」という体験会企画でした。年少さんが消防車の中に入りたくと、ほぼ毎日のように頼みに来たことから、ひらめいたようです。ハンドルを触ったりホースを持つことができたなら喜んでくれるかもしれないと、年少さんに声を



かけて回りました。次々に集まってくる年少さんに「服も着れますよ」「これ着てみる人?」と自分たちが作った物を積極的に提供しています。「ここに頭入れて」「帽子を被って」と着衣の手伝いもしています。支度が整った年少さんは消防車に乗り込んだり、「写真も撮れますよ」と始まったばかりの即席写真撮影会に参加したりしています。次々に遊びが生まれるのは、体験会の経験者が多かったことと、集まってくれた年少さんの笑顔が嬉しかったのと、何より消防隊が「かっこいい!」と、憧れを持っていたからかもしれません。(高橋敬子)

### ソニー幼児教育支援プログラム最優秀園教育助成金の活用

2022年度ソニー幼児教育支援プログラムにおける最優秀園受賞に伴い、教育助成金をいただきました。

近年の懸案であった2件について、助成金を活用しました。

- ①旧園舎の保育室5室に造りつけの収納棚を撤去し、新たに設置しました。奥行きが確保され、棚板の間隔を調整でき、素材などを置きやすくなりました。
- ②年少組3クラスのキッチンと電子レンジを購入しました。来年度から使用します。



# 初めてのうめっこフェスティバル 2月

年長 たか1組

2月末にうめっこフェスティバルを開催し、年中組を招待しました。何をするかは子どもたちと相談し、たか1組は、くじ屋、お化け屋敷、電車(乗車できる)、迷路、劇の五つになりました。対象が年中児ということで、年中児のクラスの人数を数えて、その個数を制作しているグループもありました。

年長と年中の交流の場「うめっこひろば」は昨年度から取り組み、今年は6月末からペアを決めて実施してきました。そのうめっこひろばで、うめっこフェスティバルのことを話題にした際、年中のAちゃんから「お化け屋敷って怖いんじゃないの?」と聞かれました。すると、お化け屋敷グループのHちゃんが「怖いんじゃないものいるよ」と答えました。

翌日、6人のお化け屋敷グループがそれぞれお化けになるために衣装を作っていました。役を聞いてみると、座敷童や九尾キツネと妖怪が挙がる中、Kちゃんは「普通の女の子」と答えます。理由を聞いてみると、どうやらHちゃんが前日の年中児Aちゃんの発言を、グループの仲間に紹介したことで、「怖くない役割」をつくったようでした。年中児の言葉を聞き、相手の思いに寄り添おうとしていることがよく分かります。

また電車グループは、車両のほかに改札機も制作しました。「去年の年長(の改札機)は、中に人が入っていた」「人が入らない自動改札機にしたい」と1年前に招待されたことをよく覚えていました。また昨年度の年長は自動改札機を制作しましたが、難しさから、中に人が入って切符を出し入れしていた、ということも記憶しており、今年は自動で切符が出る方法に挑戦したいとのことでした。実際の制作過程は、予想外の連続でしたが、ローラー式と滑り台方式の改札機を作ることができました。交流の継続を通して、年度を超えて技術や知恵が受け継がれ、更新されているのが分かります。



約3週間ほどかけて全てのグループの準備が整いました。年中さんは、うめっこフェスティバルを待ちわびていたようで、大賑わいとなりました。来年のうめっこフェスティバルはどうなるでしょうか。今年の年長の経験や知恵が受け継がれていくのでしょうか。今から楽しみです。(西井宏之)

## 絵日誌とは?

昨秋から年長児を中心に、日々の生活や遊びの様子を絵日誌としてかきとめています。昼食後、希望者や当番を中心に、黒など単色のペンでかいていきます。単色であるのは、子どもがかきたい思いや光景を一気にかききれるようにするためです。描画中に色を選ぶことで、絵に込める思いが中断することを防ぎます。

かき終わったら絵に込めたお話を保育者に聞いてもらいます。お帰りの頃には、入口近くに掲示し、おうちの人にも見てもらえるようにしています。その日何があったか、子どもなりに生活や思いを絵日誌に綴っています。描画の技能は全く問いません。かきたいと思う気持ち、そのものが表れることを大事にしています。